

地図にみる世界の現実

田中 隆志

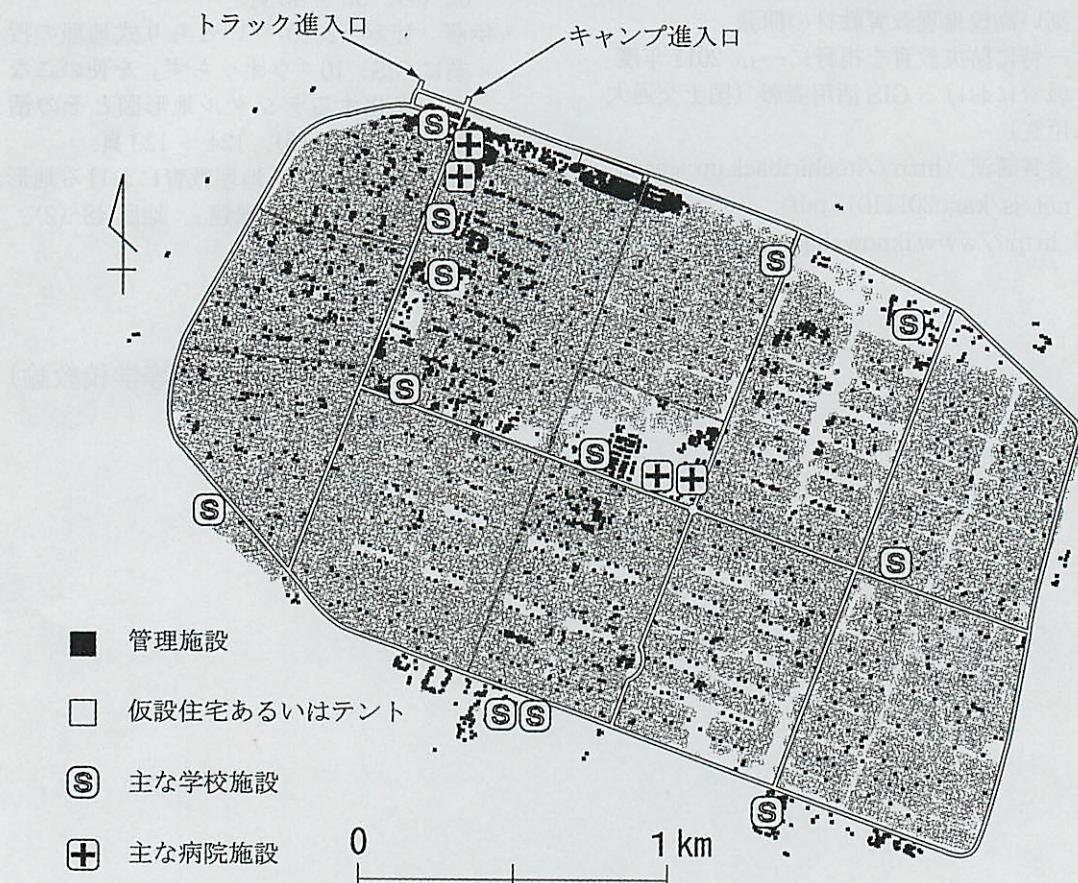


図1 ザータリ難民キャンプ（2014年7月、UNOSATデータにより作成）

1. はじめに

地図は、昔も今も地理の最も基本的な道具の一つである。それは地図が、現実世界を如実にあらわす道具だからである。想像力を働かせて、よく見る

ほど、その地域の現実に近づくことができる。

これから紹介する3枚の地図を見て、みなさんはどのような現実を感じ取るのだろうか。図の解説文とともに、地図をよく見てほしい。

2. ザータリ難民キャンプ

2011年から始まったシリア騒乱により現在、シリアの全人口2,200万人のうち約半数が国内外への避難民となっている。このうち国外に避難した人々の大半は、トルコを中心とした周辺諸国に逃れ、それぞれの国の政府やWFP（世界食料計画）、UNHCR（国連高等難民弁務官事務所）などの支援を受けた難民キャンプや、避難した国的一般の都市や農村（ホストコミュニティ）に逃れて暮らしている。

地図中のザータリ難民キャンプは2012年7月28日、ヨルダン政府がシリアとの国境北十数kmの地点に設置したものである。面積はわずか5.4km²に過ぎないが2015年8月現在、ここには81,000人もの難民が暮らし、シリア人の難民キャンプとしては最大規模のキャンプとなっている。周囲を有刺鉄線で囲まれ、當時警察と軍隊に守られている中で、住民は街路で区分された12の居住区で生活している。難民の生活場所は、当初はテントであったが、現在は多くが仮設住宅になっている。給水施設、倉庫、モスク、セキュリティ施設、WFPなどの国際支援団体や国境なき医師団などのNGO団体の事務所など管理施設が数多く点在している。学校や病院も決して多くはないが、アラブ首長国連邦、クウェート、カタールなど湾岸諸国の資金提

供で建設されている。近年、中心を通る通称「シャンゼリゼ通り」には、難民自身の手によって、野菜やケバブ、家電製品、衣類、コーヒー、シーシャ（水タバコ）などを並べて売る店舗や床屋も開業されるようになっている。

しかし難民は政府から正式な就労許可が得られているわけではなく、安定した現金収入源をもたないケースが多い。18歳未満の子供がキャンプの半数以上を占めているが、多くの家庭では子供を学校に行かせずに働かせたり、食事回数を減らしたり、借金に頼ったり、生活状況も厳しい。人心の荒廃から、売春や麻薬取引、性的暴行などの犯罪も多い。

ザータリ難民キャンプでは現在、毎日120人程が本国シリアにもどる選択をしている。これは2014年のロシアによるIS空爆で、母国シリアの政治情勢がさらに混迷化し、難民の流入が短期間に激増したため、支援団体や政府の負担を過度に増大させ、ヨルダン政府が難民支援を大幅に制限したこと、またWFPが、難民に支給してきた食料引換券あるいは電子マネーの支援額を大幅に縮小させたことなどが背景である。

ところで、難民の9割ほどはこうした難民キャンプにすら入れず、その外にある普通の町や村、つまりホストコミュニティーで、賃料を支払い、アパートなどで仮住まいをしている。実は

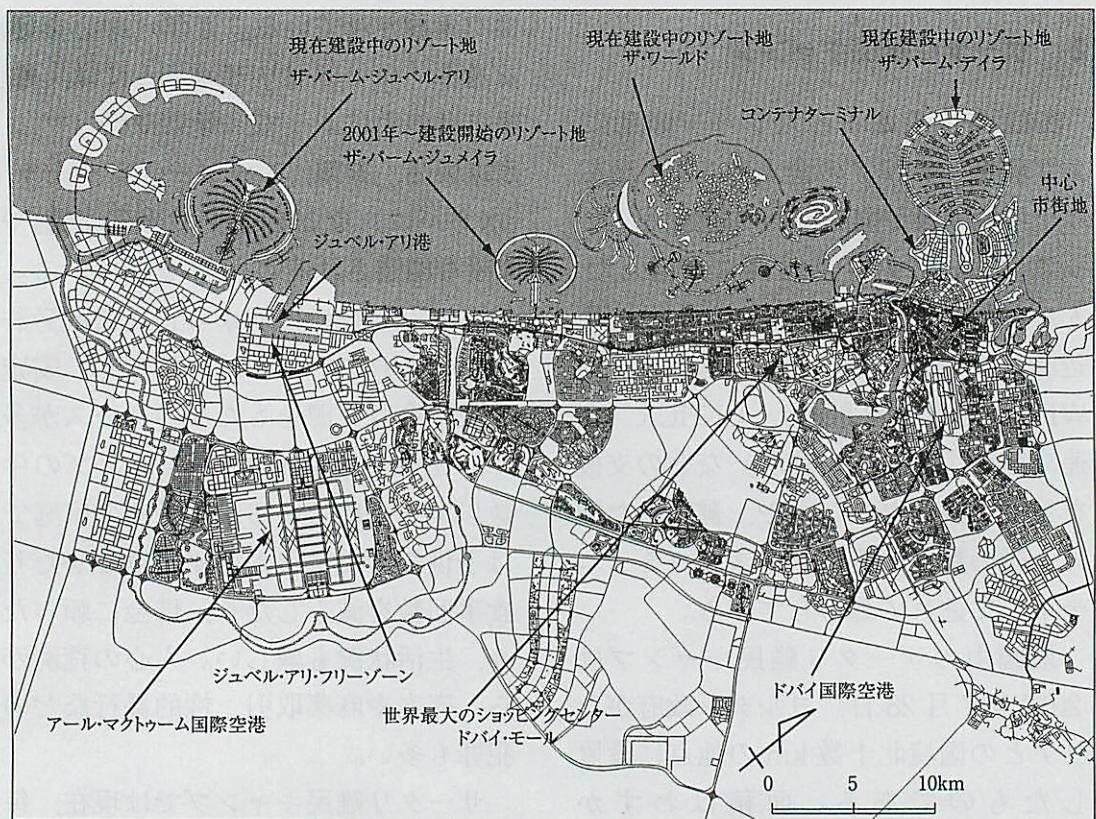


図2 ドバイ中心地区の地図 (Dorchester Investmentsの公式サイト資料により作成)

彼らもまた近年の難民急増で家賃が高騰したため、苦しい生活を余儀なくされている。こうした中で、難民たちの中には、移送業者にかけなしの有り金を支払い、命がけで地中海を渡り、ヨーロッパを目指すものも増えている。

3. ドバイの脱石油戦略

アラブ首長国連邦の一国であるドバイ首長国は、石油資源の集中する西アジアの中にあって、もともと石油埋蔵量が少ない。そのためかなり早い時期から、政府が地元商人の協力を得ながら、石油依存によらない経済を目指し、

産業の多角化を図ってきた。

政府が脱石油戦略の柱として行ったのは、交通インフラを徹底して整備し、世界中から多くの旅客と貨物を集めることだった。まず「空」のインフラについては、1990年代後半以降、ドバイ国際空港が、ヨーロッパ、アジア、アフリカへのアクセスの利点から世界のハブ空港としての地位を確固としたものにし、2014年1月には国際観光客到着数で、ロンドンのヒースロー空港を抜き世界一となった。2000年代初頭以降は、周辺のリゾート施設や大型商業施設の建設も民間業者により進

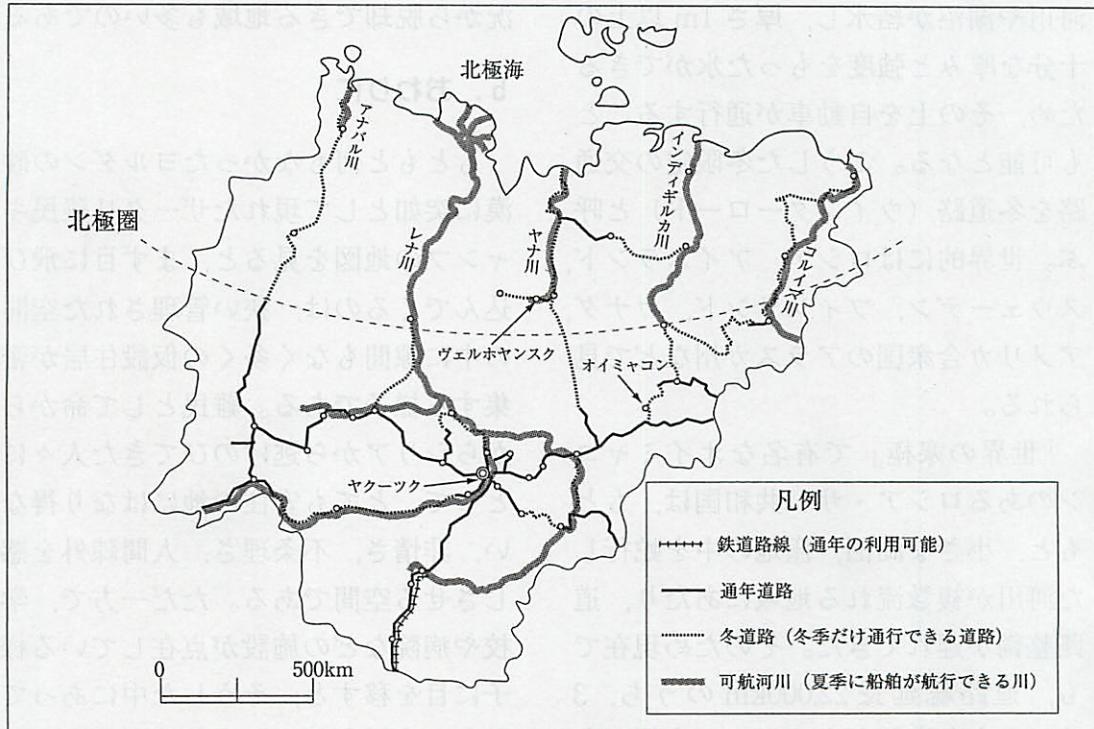


図3 サハ共和国の道路網
(「ロシア連邦サハ共和国の冬道路と地球温暖化の影響」により作成)

められ、それをあてにした国際観光客も多数、ドバイを訪れるようになった。地図中の海岸線沿いにある、やしや世界地図をイメージしたザ・パークやザ・ワールドという巨大な人工島、世界最大のショッピングセンターであるドバイモール、超高層建築のブルジュハリファがそうした中で作られた施設の代表である。

また「海」のインフラについては、1970年代末に市街地西の砂漠を掘り込んで建設された世界最大の人工港、ジュベル・アリ港が、1980年代に港を囲むように作られた「ジュベル・アリ・フリーゾーン」という経済特区の

玄関港として着実な発展を進めてきた。フリーゾーンでは、15年間の法人税減免、個人所得税なし、関税なし、取引通貨の制限なし、雇用契約の規制緩和といった企業に様々な特恵が用意されていた。そのため世界中の大企業の物流施設や工場が多数立地した。その結果現在では、中東最大のコンテナターミナル、物流拠点となっている。

現在のドバイの繁栄は、脱石油戦略の中での官民をあげた努力の賜物である。

4. サハ共和国のウィンターロード

北極圏付近の寒冷地域では、冬季に

河川や湖沼が結氷し、厚さ1m以上の十分な厚みと強度をもった氷ができるため、その上を自動車が通行することも可能となる。こうした冬限定の交通路を冬道路（ウィンターロード）と呼ぶ。世界的にはロシア、アイスランド、スウェーデン、フィンランド、カナダ、アメリカ合衆国のアラスカ州などで見られる。

「世界の寒極」で有名なオイミヤコンのあるロシア・サハ共和国は、もともと、小さな湖沼、窪地の中を蛇行した河川が複数流れる地域にあたり、道路整備が遅れてきた。そのため現在でも、道路総延長22,000kmのうち、3分の2を冬道路が占めている実態がある。確かに、共和国南部の比較的温暖な地域には通年道路や、シベリア鉄道の支線が走る所もある。しかし夏になつても、橋が架からない川も多く、通年道路は所々が寸断されている。また夏にはむしろ、ぬかるんだ湿地が多数出現するため車の通行が困難となり、多くの都市や農村が孤立する。首都、ヤクーツクとのアクセスすら、おぼつかない地域も多い。夏になると、比較的大きな川が、内陸水運に利用できるようになるのも事実ではあるが、こうした陸上交通の不便さを打ち消すほどの活用には至っていない。サハ共和国では、11月上旬から翌年の4月下旬までの約6か月弱の間、冬道路が出現して、はじめて首都と繋がり、孤立状

況から脱却できる地域も多いのである。

5. おわりに

もともと何もなかったヨルダンの砂漠に突如として現れたザータリ難民キャンプの地図を見ると、まず目に飛び込んでくるのは、狭い管理された空間の中に隙間もなく多くの仮設住居が密集する様子である。難民として命からがらシリアから逃げのびてきた人々にとって、とても安住の地にはなり得ない、非情さ、不条理さ、人間疎外を感じさせる空間である。ただ一方で、学校や病院などの施設が点在している様子に目を移すと、そうした中にあってさえ、生活者として生きる人々がいることや、こうした人々に支援の手を差し伸べる人たちがいることも感じ取ることができ、人間の逞しさや優しさに触れることができる。

また国家の命運をかけた脱石油戦略をすすめるアラブ首長国ドバイの地図を見ていると、まずは、都市の隅々にまでり巡らされた未来都市を感じさせる道路網、世界や太陽系宇宙をもかたどった海岸沿いの人工島に目を奪われる。人間の可能性の発露とも、自然への無謀な挑戦とも受け取れる、複雑な光景である。この繁栄がずっと続いたら素晴らしいのにという期待と、果たしてこの繁栄がずっと続いていくのかといった危うさの入り混じった感覚で見ざるを得ない不思議な地図である。

そして極寒の地、シベリアにあるサハ共和国の地図をよく見ると、北極圏には、通年道路がほとんどなく、冬の間、河川が凍結して「冬道路」にならないと孤立してしまう地域がでてしまう事実が浮かび上がる。我々日本で生活する人間の常識では推し量れない世界である。

本当に地図は面白いと思う。一見して無機的に見える地図でも、想像力を逞しくしてみることで、私たちを現実世界に導いてくれる。

〈参考文献〉

- ・立山良司：『なぜシリア難民はヨーロッパを目指すのか中東の「プッシュ要因」から探る』現代中東政治。<http://synodos.jp/international/15332>
 - ・奥村誠・河本憲・ボヤコワ サルダーナ「ロシア連邦サハ共和国の冬道路と地球温暖化の影響」

(たなか たかし／

群馬県立桐生女子高等学校教諭)

書籍案内

特集に関連する書籍の紹介

宇根寛・伊藤智章・田中隆志

大竹一彦・秋山実著『二万五千分の一地形図が変わった 進化する地図の世界』
(日本地図センター, 2015年, 265p, 本体2,000円)

内容 2万5千分1地形図を中心に、測量技術の変遷とそれによる地図の作成方法の変化を詳しく述べている。長年実際に地図作成や測量行政に携わった者でなければ知りえない詳細な情報が多く盛り込まれており、地図作成の技術と背景を基本から理解することができる。

新田次郎著『剣岳 点の記』(文春文庫, 2006年, 407p, 本体741円)

内容 20世紀初頭、陸軍陸地測量部の測量官として、北アルプスの前人未到の峰、剣岳の山頂に三角点敷設の命を受けた主人公、柴崎芳太郎。それは、明治維新で進められてきた、日本の三角点測量網の最後の空白を埋め、全土をカバーする地形図作成のための重要なミッションだった。地元の山岳信仰の掟から、登頂を強く忌避する地元住民、初登頂を争う日本山岳会の登山家の一行、人を寄せ付けない自然の厳しさ。様々な敵と戦いながら測量チームは山頂を目指す。新田次郎の山岳小説の代表作の一つだが、「地形図」がどのような人達によって整備され、国家はそれをどう進めてきたのか、実務と政策の両面から読み取ることが出来る。今日まで綿々と受け継がれる地形図と、水準点、三角点の価値がよくわかる。

竹村公太郎著『日本史の謎は「地形」で解ける』(PHP文庫, 2013年, 379p, 本体743円)

内容 江戸の開府と徳川家康の土木工事、織田信長の比叡山焼き討ち、吉原遊郭の立地、京都、大阪、福岡の都市空間の形成過程など、日本史の史実に対する疑問に答える形で、権力者達の地形の使い方や当時の自然および社会環境について解説している。著者は建設省（国土交通省）の河川局長を務めた土木技官。治水や都市インフラ整備の観点から歴史的な出来事をわかりやすく解説するととも